酒場で一番稼いでいる女剣士を快楽堕ちさせてただの女にする話

作・蕎麦枕

Adult Only

R18

成人向け

第一話（お試し版）

「今日はあたしの奢りだー！　飲め飲めー！」
上機嫌に木製のジョッキを掲げ、あたしは叫んだ。
酒場にいる老若男女問わず、様々な人間や種族の人が同じように手に持ったジョッキやカップを掲げたのを見て、思わず頬が緩む。
「さすがはラディナ様だよな！　まさか古い洞窟に住み着いていたゴーレムを一人で倒すなんて！」
「それだけじゃないよ。ラディナ様は、ワームに襲われていたあたしの息子を助けて家に送ってくれたんだ！」
「なんて強く麗しい赤髪の女剣士ラディナ殿！　今宵はあなたのために、一曲謳わせて頂きましょう！」
人々に褒め称えられている赤髪の女剣士、ラディナとはあたしのこと。

あたしは死んだ父さんに倣って、困っている人々を助けながら世界を旅している。女だけど剣を持って、男同然に生きているのだ。おかげでこの辺の地域ではすっかり有名になったみたいで、酒場に入るとモンスター退治の依頼が度々舞い込んでくるようになった。

今日もモンスター退治をこなして大量の酒を飲み、気持ちよく朝まで寝る。ああ、なんて幸せな日々なんだろう。これ以上の幸せなんて、考えられない。

そうして浴びるように酒を飲み、足元が歪んで見えるようになった頃。

「もう飲めない……おやっさん。鍵ちょーだい」

「あいよ。あんたのために、特別良い部屋を用意しておいてやったぜ」

「ほんとー！　助かるよ、ありがとう」

酒場の二階は宿屋になっていて、あたしはそこで寝ることになっていた。店主から鍵をもらって部屋に入り、装備品を脱ぐ。ただし、何があってもすぐ対応できるように、剣だけは枕元に置いた。

「うーん、飲み過ぎたなあ……明日の朝、水浴びでも行くかあ……」
雑にベッドへ横になると、もう眠気が襲ってくる。
抗う理由なんてない。あたしは早々に意識を手放し、深い眠りへと落ちていった。

――……ふと、眠っていた意識が浮上する。あたし一人しか泊まらないはずの部屋の中で、誰かの足音がしたのだ。
「誰！」
酒の飲み過ぎで頭がズキズキと痛んだけど、無理やり身体を起こして剣を取る。月明かりしか入らない部屋の中、目を凝らしてよく見ると、見知らぬ男達が複数人、ベッドの周りに立っていた。
「ちっ、起きちまったか」
「まあ大丈夫だ。このピンクフラワーのオイルから作った薬で……」
夜盗かと思い、すぐに逃げ出そうとしたが、さすがに酔いの回った身

体で素早く動くことは厳しい。あっという間に取り押さえられてしまって、剣も遠くに投げられてしまった。悔しいけど、身動きが取れない。
「なっ……なんなんだよお前ら！　どこの誰だ！」
「初めまして、赤髪の女剣士ラディナ様。あんたは知らねえだろうがな、俺たちゃあんたのおかげで食い扶持を逃しているハンターの一団さ」
リーダー格らしい髭面の男が、ニヤニヤと汚らしい笑みを浮かべながら言う。
「食い扶持を逃してる？　はっ、あんたらが行って倒しきれなかったから、あたしが依頼を受けたんだろうが。自分の実力不足を人のせいにしてんじゃねえよ」
酔っていても口はよく回る。ここでつけ入る隙を見せては行けない。強気な姿勢を保ったまま、あたしは男を睨み続けた。髭面の男はわざとらしく肩をすくめ、大袈裟にため息をつく。
「あのなあ、それが今回だけなら別にこんなことしねえよ。この街だけ

でなく他の地域でもなあ、あんたがほとんど依頼を受けちまうせいで、俺たちの出る幕がねえ。ああもちろん、世間様はそれでいいだろうさ。でもな、俺たちは納得いかんのよ」

横から腕が伸びてきて、ぐっと顎を掴まれた。抵抗する間もなく、無理やり開かされた口の中に、何かを流し込まれる。

「あっ、やめっ……うぷっ、んんっ……」

「随分と鍛えた身体のようだが、所詮女は女なんだ。だから、ちょいとわからせてやろうと思ってね」

ごくり。口に入れられたものを、吐き出すこともできず飲み込んでしまった。それはふわっと甘い花の香りを漂わせ、どんどん身体を熱くしていく。

「うっ……なに……何を、飲ませ……」

「いわゆる媚薬ってやつだよ。ピンクフラワーってモンスター知ってるか？　あいつのオイルは、娼婦館でも雰囲気を出すために薄めて使われ

てるやつでよ、それの原液を飲ませてやったんだ。ほら、こうして触ってみると……」
髭面の男の手が、無遠慮にあたしの胸を掴んだ。元々大きくない胸だけど、なんだか張っているようで、乳首が立っているのを感じる。
「ひゃんっ♡」
自分でもびっくりするくらい、甘い声が出た。痛いくらいに掴まれているのに、それが気持ちいい。そして、抵抗ができない。
「はは、早速効いてきたな」
ぐにぐにと貧相な胸を掴まれ、揉まれているうちに服も脱がされ、あたしの胸が外気に晒される。あたしを取り押さえてる男たちが、ニヤニヤして見ているのが伝わってきた。こいつら、こんな身体のあたしに興奮してるらしい。
心底気持ち悪いはずなのに、どうしてだろう。お腹の奥が、熱くなって、むずむずしてきた……♡

「おい、可愛がってやれ」
髭面の男の言葉をきっかけに、周りの男たちは餌をもらった犬のように、あたしの身体に群がり始めた。
「あっ、いやあっ……触んないっ、で♡　だめっ、だめえっ♡」
乳首をベロベロと舐められたり、引っ張られたりして、身体が震える。首筋や、脇もねっとりと舐め上げられた。いろんな方向から、複数の男の舌があたしの身体をぴちゃぴちゃ、じゅるじゅると音を立てながら舐め尽くす。
「あっ、あっ♡　だめ、乳首いやあっ♡　ビリビリしてえっ、気持ちいいからあっ、やめてえっ♡」
こんな声出したくないのに、甘ったるい声が抑えられない……♡
「見てみろよ、こいつ乳首ビンビンだぜ」
「コリコリにしちまってまあ、身体は素直だな」
「こっちはどうだ？」

すりすりと脚を撫でられて、広げられる。身体に力が入らなくて、抵抗できない。だって、撫でられるだけで気持ちがいい……♡

股座がやたらと熱くて、なんだか漏らしたような感覚がある。こんな良い歳しながら漏らすなんて、と思ったけど、男たちの反応を見るとどうやら違うみたいだ。

「もう濡れてやがる。随分と濃いメスの匂いだぜ」

「ド淫乱がよ。正義の女剣士様なんて表だけで、本当は男漁りでもしてるんじゃねえか？」

男漁り、だって？　憧れる父に少しでも近づきたくて、鍛錬を怠らないあたしに対して、なんてことを言うんだ。

「そ、そんなことしてるわけ、ないだろ……男と夜を一緒にするなんて、したことない……」

どうにか気持ちだけでも抵抗したくて、そんなことを言うと、黙ってみているだけだった髭面の男の表情が変わった。

「あ？　じゃああんたは処女ってことか？」
「しょ、じょ……？」
何の話かさっぱりわからない。聞き返しても、男の口から答えは出ない。その代わり、男の口角がゆっくりと上がっていった。
「……ふ……はははは！　なんてこった！　まさか女剣士ラディナ様の処女を貰えるなんてなあ！」
髭面の男は笑いながら、下の履物を脱ぎだす。ぶるん、と反動をつけて出てきたのは、お、男のアレ。つまり、イチモツだ。なんだあれ、男のって、あんなふうになるのか？
真上を向いて、血管が浮き出ているそれは、ヒクヒクと震えている。遠い昔に見た父の物は、下を向いていたはずなのに、どうしてだろう。
すごく不思議な気持ちだ。何故、あれを見ていると、お腹の奥が切なくなってしまうんだろう……♡
キュウウン♡　とお腹の奥が引き締まるのを感じ、思わずもじもじし

てしまうと、髭面の男があたしの足を割ってその間に陣取った。
股座にイチモツを擦りつけられると、腰が震えてしまう。こいつのイチモツはとても熱くて、余計にお腹の奥をむずむずさせた♡
「な、なにをするんだ？」
「ラディナ様よお～、いや、ラディナちゃんよ～。あんたは今から女になるんだ、オレのチンポでな」
ペチペチと男のイチモツがあたしの股座に当てられる。ピチャピチャと水音が聞こえるのはなんでだろう。やっぱり、漏らしているんだろうか。
身体は抵抗できない、というより、あたしの意思とは関係なく、抵抗する気がないみたいだ。押さえつけられているというのもあるけれど、イチモツを目にしてから、股座が疼いて仕方がない♡
「ま、媚薬のおかげで破瓜の痛みすら気持ちよくなるだろうよ。一気に入れてやるからなあ」

男のイチモツの先が、あたしの股座にあてがわれる。
つぷ、と何かがあたしの中に入り始めたのを感じた。初めて感じるこの感覚、一体何なのだろう。
「ひっ、あっ、あっ♡」
声が勝手に出てしまう。腰がヒクヒクと浮いてしまうけど、髭面の男に掴まれ、抑えこまれてしまった。
「ぐううう、締まりがやべえな……ほれ、ズブっと、な！」
そして男が腰を押し進め、あたしの中に強烈な圧迫感が生まれる。
「はっ……あっ……？」
「息できねえかあ？　まあそのうち慣れるだろ」
ズンッ♡　ズンッ♡　身体の奥にまで、髭面の男のイチモツが、抉りこんできているらしい♡
こんな衝撃初めてで、お腹の中がこいつのイチモツをキュウウウウ♡って締め付けているみたいっ♡

「んはあっ、あっ、なにっ？　これっ、あっ、あぁあっ♡」
「くく、これがセックスだよラディナちゃん。おらっ、子宮口開けて精液受け入れる準備しとけ」
髭面の男は容赦なく、あたしの身体の奥まで抉る♡
苦しいはずなのに、息がうまくできないのに、なんでこんなに気持ちがいいんだろう♡
「んあああっ♡　ひいっ♡　おっ、んおおっ♡　奥っ、奥やらああっ♡　こんなのっ、こんなの知らないいいいっ♡」
声がっ♡　勝手に出るっ♡　周りの男たちはあたしの顔を覗き込んで、ニタニタと笑っていた♡
「ひひっ、お頭、こいつ媚薬効きすぎてアへってますぜ」
「結局女ってことだよ。ナカは俺の子種が欲しくて、仕方ないみたいだぜ？」
のし、と髭面の男があたしの上に覆い被さる♡　筋肉質な身体が重た

いけど、その重たさが心地いい♡
イチモツはさらに奥まで入り込んできて、あたしの奥をコンコン♡とノックしているみたいだ♡
「あっ、あっあぁぁああっ♡　ぎもぢいいっ♡　なにごれえっ♡　変にっ、変になるううう♡」
「おうおう、なっちまえよ！　くそ、女を抱くのなんて久々過ぎてもう出ちまう！　ほら、イクぞ！　中にこってり出してやっからな！」
「やらああっ♡　おかしくなるうっ♡　おかしくなっちゃうよおおっ♡」
男の腰の動きはもっと早くなり、パンッパンッ♡　と肉がぶつかり合う音になる♡
もうわけがわからなくなって、あたしの身体は散々暴れまわるけど、どうしても逃げられなくて気持ちいいのが身体の中に溜まっていく♡
ああ、ダメ♡　頭がふわふわして、目の前がチカチカするううう♡

「やらあああっ♡　おかしくなるっ、おかっ、しっ、あっ、イッ、あっ、あああぁあっ♡」
「あーイクっ、出すぞ、クソ、出るっ……！　うっ！」
男の身体が一度ビクンと跳ねると、あたしの身体の中に熱いものが流れ込んできた♡
いっぱい流れてきて、お腹の奥が満たされていくみたい♡
「あっ、あっ、なにっ、これっ♡」
「これが男の精液だ、全部出してやっからな……うっ、ふううっ」
精液っ♡　精液が流れ込んできて、お腹の中がヒクヒクするっ♡　グリグリってさらに体重を乗せられて、深いところにイチモツを押し付けられて、もっと気持ちよくなってしまった♡
おまたから何か出ちゃう♡　そう思っても遅くて、ぷしゃあって、何か出てしまった♡
「こいつ、処女のくせに中イキはするわ潮吹きはするわ、とんでもねえ

女だな……」
男はようやくあたしの上から避けてくれた♡　おまたからイチモツが抜けていって、寂しくてヒクヒク動いてしまう♡
「よーし、お前らも入れていいぞ」
髭面の男がそういうと、別の男が今度はあたしの中に熱いイチモツを突き入れてきた♡
「あひいいいいいいいい♡」
「うおっ、うねり方すげえ……こりゃあ名器だな」
「俺のはしゃぶってくれよ、口が寂しいだろ？」
「んっ、はあっ……あ、あっついよお……♡」
目の前がオチンポだらけになって、精液をたくさん身体にかけられて、それから――……。
――……気が付けば明け方まで、あたしはこいつらに散々犯されてし

まった♡
　おまたのことはオマンコと呼ぶことを教え込まれた♡　おまたと間違えてしまうと、喉奥までイチモツを咥えさせられて、胃の中にたっぷり精液を流し込まれてしまった♡
　そうそう、イチモツじゃなくて、これはチンポと呼ぶんだと言われた♡　たくさんのチンポに犯されて、もう何が何やらわからない♡　それから、意識が飛びそうな時の言い方も教えてもらったんだ♡
「んあぁぁあ♡　無理っ、もう無理いっ♡　あっ、はあぁぁあっ♡」
　ズンッ♡　ズンッ♡　とオマンコの奥を突かれて、その度に意識が飛び……ううん、イッてしまいそう♡
　もう他の男たちは疲れて床で寝始めたけど、はじめにあたしにチンポを入れた髭面の男だけは、ずっとあたしにチンポを入れていた♡
　長い間オマンコをズコズコされて、たくさん精液を出されて、あたしのお腹の中はもうタプタプ♡　それなのにこいつは、まだまだ硬くて太

くて、熱いチンポであたしをイカせてくれるの♡
ううん、もちろん嫌なんだ♡　嫌なのに、今は気持ち良くてどうでもよくなっちゃって、ああもうわけがわからない♡
「おら、マンコしっかり締めろよ！　出すぞ、奥で出してやるからな！
自分が女だって思いしれ！」
「やっ♡　やだあぁああっ♡　イクっ、またイクウウウううっ♡」
そんなことを考えていたら、男の思いっきり重たい一撃がオマンコに突き刺さり、そのまま熱い精液が流れ込んできた♡
ビュルルルルルっ♡　ブビュルルルっ♡　ブビュッ♡　ブビュッ♡
お腹の奥で弾ける精液の熱さに、あたしはもう舌を出しっぱなしになるくらい、気持ちいいのをずっと感じるしかなかった。
「あっひっ、イッ……んおおおっ……♡　おっ、んおぉおっ……♡」
「ふー、出した出した……。めちゃくちゃ搾り取りやがって、この淫乱マンコがよ」

最後にまた奥にズンッ♡　と突き入れられて、ピュクク♡　と弱く精液が流し込まれたのを感じ、あたしもまたイッてしまった♡
くそう、こんなやつらに犯されちまうなんて、女剣士の名が廃る♡

強い疲労感の中、あたしの意識は落ちていく。
それでも身体は気持ちいいのが続いていて、お腹の奥もずっと疼いたままだった……♡

※続きの二話、三話は製品版でお楽しみください